児童期における役割取得能力と視点取得能力

○本間 優子¹・内山 伊知郎²・
(新潟青陵大学¹・同志社大学²)

Key words: role taking ability, perspective taking, childhood

目的

役割取得能力とは、他者の知覚、感情、思考を自己の立場からだけではなく、他者の立場からも理解する能力である (Selman, 1976)。役割取得能力に関しては、その測定法として、Selman & Byrne (1974) のジレンマ課題が広く用いられている。その内容および方法は、ジレンマを含む社会的な対人葛藤場面の物語を子どもたちに提示し、物語の登場人物の立場における、その事態および他の登場人物の感情や考えなどを推論する質問を面接法で行うというものであり、日本では荒木 (1988)による木のぼり課題、本間・内山 (2002b) による規則および対人場面課題が作成されている。

他方、Davis (1983) は、共感的関心 (他者への同情や思いやり)、個人的苦痛 (他者への苦しみに対する苦痛感や不快感)、ファンタジー (仮想の状況・場面に自分を置きかえて想像する)、視点取得 (他者の心理状態を推測する) の4下位尺度による対人的反応性指標 (Interpersonal Reactivity Index; IRI) を作成し、その児童版 (Litvack-Miller, McDougall, & Romney, 1997) の日本語版を長谷川・堀内・鈴木・佐渡・坂元 (2009) は児童用多次元共感尺度として作成している。

その下位尺度である視点取得尺度は、役割取得能力と類似する能力について質問紙という、より実施コストがかからない方法で測定できる。しかしながら、役割取得能力で測定する発達段階という質的な部分は捉え切れない可能性も考えられる。そこで、本研究では両者の関連について検討を行うこととした。

方法

対象者 調査対象は公立小学校の5, 6年生に在籍する児童95名であった (男児49名, 女児46名)。

役割取得能力測定課題について

本間・内山 (2002b) で作成された課題を使用した。ストーリー展開は荒木 (1988) の木のぼり課題に準じているが、物語の内容は規則場面と対人場面の2種類で作成されている。発達段階の評定方法は荒木 (1988) に従った (段階1=1点, 段階2=2点, 段階3=3点)。

視点取得能力測定課題について

長谷川・堀内・鈴木・佐渡・坂元 (2009) による児童用多次元共感性尺度の下位尺度より、視点取得尺度を用いた。全9項目であり (e.g., だれかをせめる前に、自分がその人の立場だったらと考える、友達のいやなところをその友達に言う前に、自分がそんなことを友達から言われたらどう感じるんだろうと考える、友達からはそのことがどんなふうに見えるんだろうと考えることがある)、5件法で測定された (5=あてはまる-1=あてはまらない)。

倫理的配慮

本研究は新潟青陵大学倫理審査委員会において審査を受け承認を得ている。調査は対象校の各校長に事前に説明を行い、同意書に署名を得た上で行われた。

結果

役割取得能力について、発達段階の分布を示す (Table1)。視点取得尺度得点については、 $M=3.48$ ($SD=.58$), $\alpha=.76$ であり、長谷川他 (2009) 同様に、信頼性が確認された。

Table1 役割取得能力の発達段階の人数の分布 (%)

発達段階	規則場面の役割取得能力	対人場面の役割取得能力
1	55 (57.9)	52 (54.7)
2	36 (37.9)	36 (37.9)
3	4 (4.2)	7 (7.4)

役割取得能力と視点取得尺度の相関関係を検討したところ、有意な相関関係は認められなかった (規則場面, $r=-.12$, 対人場面, $r=-.02$, 共に $n.s.$)。さらに、規則、対人場面それぞれの役割取得能力の発達段階と視点取得尺度得点について、Kruskal-Wallis 検定を行ったが、各々の発達段階間で有意な差は認められなかった (規則場面; $H(2)=2.01$, 対人場面 $H(2)=2.56$, 共に $n.s.$, Table2)

Table2 役割取得能力の発達段階と視点取得得点 (Median, Q)

役割取得能力	段階1	段階2	段階3	χ^2
規則	3.56 (0.45)	3.33 (0.34)	2.83 (0.86)	2.01
対人	3.50 (0.39)	3.50 (0.42)	3.22 (0.28)	2.56

※カッコ内の数値は四分位偏差を示す。

考察

本研究から、視点取得尺度は、役割取得能力で測定する概念とは異なる概念を測定している可能性が示唆される。

役割取得能力は認知発達理論をベースに置くことで、質的に異なる認知的特徴ごとに階層的に構造化される。また、人間の行動の社会的な意味 (自分の行動が相手にどのような影響を与えるのか、もしくは自分の行動を相手がどう受け取るか) についても、その理解の程度を含めた発達段階を明らかにしている点に独自性がある。役割取得能力の発達段階を評定することにより、児童が他者との相互関係の中で、知覚、感情、認知、社会的側面を含む、どのような認知構造 (質的特徴) を有し、そしてそれがどのような発達段階に位置するかを理解することができる。このことは、実施コストはかかるものの役割取得能力課題を用いる大きな利点であり、本研究により、役割取得能力課題を用いて測定を行う意義を示すことができたと言えるだろう。

謝辞 本研究はJSPS科研費16K17457の助成を受けた。
(Yuko HONMA, Ichiro UCHIYAMA)